

特別支援学級における主体的・対話的で深い学びを実現するための国語の授業実践及び分析

学籍番号 209205

氏名 川崎 育臣
主指導教員 梅川 康治

1. 研究の背景・目的

1.1 研究の背景

小・中学校学習指導要領（平成 29 年 3 月）及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領総則編（平成 29 年 4 月）において、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが求められている。昨今「特別支援教育」は教育現場でかなり浸透しており、障害者の権利に関する条約に基づく「インクルーシブ教育」の理念に基づき、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある多様な学びの場での整備が広がってきている。これは、平成 19 年 4 月から「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、もともとは障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び支援を行うものとしてスタートし、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒の支援をさらに充実させていくことになったのである。

1.2 研究の目的

特別支援学級の児童は、集団活動を苦手とする児童が少なくないようである。特に他者とのコミュニケーションに困っていることも多いように感じられる。実習校でも、通常の学級で授業を受ける際には困っている様子が多く見られた。特別支援学級における国語の授業において、主体的・対話的に発言や行動ができるようになるにはどのような支援ができるのか。また、アセスメントの方法等の基準となるものを探っていくことが必要であると考えた。

2. 実習校の概要

実習校の通常の学級は、各学年 3 クラスで、特別支援学級 9 学級、通級指導教室 1 教室の学校である。児童の約 1 割が、特別支援学級や通級指導教室に通っており、通常の学級でも支援を必要とする児童が多い。学校教育目標は、「対話する子」である。小学校の 6 年間を通じて「自分の思い通りにならない他者、自分と同じ考え、行動するとは限らない他者との

間でも、お互い認め合い、信頼関係を築くこと」の基礎を養いたいと考えている。また、新型コロナウイルス感染予防対策のため、子ども同士が向かい合って、話し合うだけでなく、文字や絵図を通した「友だちとの対話」や観察などにおける「自然との対話」、鑑賞などにおける「音楽との対話」など、教育活動全体において、五感による対話に取り組むことを目標としている。

3. 実践内容

特別支援学級の児童が、コミュニケーションにどのような困難さを抱えているかを観察した。国語の授業だけでなく、他の授業や日常生活の場面等での行動観察をして、行動パターンや援助ニーズを探った。また、ペア活動や少人数での活動を少しずつ採り入れて、他者との関係性の構築を促す支援を進めた。対象児童は、1年目は6年児童3名、2年目は5年児童3名で、報告者が特別支援学級で担任する児童で実践を行った。最初は、机の配置を横並びにして話し合い活動を行っていたが、お互いの顔の表情がよく見えなかったため、机の配置を円になるようにした。机の配置を変えることによりお互いの顔の表情を見ながら話し合い活動ができるようになり、コミュニケーションがより円滑に行われるようになった。

4. 考察

実習校の校内の研究テーマ「主体的・対話的で深い学び」と報告者の実践課題研究「特別支援学級における主体的・対話的で深い学びを実現するための国語の授業実践及び分析」が一致しており、大学院で学んだことを活かして校内の研究にもフィードバックすることができたと考えている。特別支援学級の子どもたちには、一人一人に個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成しており、授業を行う際にも個別の指導計画の長期目標や短期目標を意識しながら、子ども一人一人にあった支援方法を探ることができている。

授業を通して「主体的・対話的な深い学び」が行えるようにするだけでなく、普段からのかかわりや、通常の学級での授業への入り込みなど学校全体の活動を通して子どもと関わっていく中で、子ども同士をつないでいくことができ学びが深まるのではないかといえる。報告者を含めた特別支援学級担任9人や校内研修会で特別支援学級での「主体的・対話的で深い学び」を行うための話し合いを通して、報告者が取り組んでいることと、他の教職員が考えていることに共通点が多くあり、共通理解の下で子どもたちと関わることができていることが分かり、子どもたちも迷うことが少なく日々の学校生活が送れていると感じられた。

今後も授業の実践や観察記録を取りながら、どのような学習をすることができたかをP（計画の様子）D（実施の様子）C（評価の様子）A（改善の様子）サイクルで継続的に改善できるようにしていきたい。特別支援学級担当の教員へのインタビュー結果等から、実践で取り組んだ内容は一定の成果が出たものと考えている。今後の課題として、教材・教具の工夫をしながら、個々の児童の援助ニーズに即した行動観察の項目の選定やアセスメントの方法の選定について探求する必要があると考えている。